日小整会誌（J Jpn Ped Orthop Ass）22(1)：1-5, 2013.

発育性股関節脱臼に関するアンケート結果と取り組みについて

徳島赤十字病院整形外科
川　崎　賀　照

要　旨　発育性股関節脱臼(DDH)は，オムツや抱き方の指導が普及したことによりその頻度は減少している．しかし，抱っこひもで児の両下肢を伸展した状態で横抱きする方法が流行っており，DDHの頻度が増加する恐れがある．本当にDDHの予防に関する知識が広まっているかどうか出産後の母親150人にアンケート調査を行ったので報告する．結果は，19%の母親が出産時に脱臼がなければその後に股関節脱臼は生じないと回答し，28%がオムツや抱き方が股関節形成に影響しないと誤った認識を持っていた．また股関節の動きを制限する抱き方を選択する母親も多く，向き癖とDDHとの関係や抱っこひもの間違った使用については認識されていなかった．DDHの予防に股関節の動きを制限しないことや開排位に保つことの重要性は，正しく認識されておらず，今後整形外科のみならず小児科，産婦人科，助産師なども含めた取り組みが必要である．

はじめに

発育性股関節脱臼(DDH)は，乳児検診制度が確立されオムツや抱き方の指導が普及したことによりその頻度は減少し，また脱臼が見逃されることも少なくなってきた[1)〜5)]．しかし，抱っこひもを用いて股関節を伸展位の状態で運動を制限して抱く親が増加しており，雑誌やインターネット上でも誤った使用例が見られる(一枚の大きな布の袋の中に児の両下肢を伸展位とした状態で横抱きする方法)．このような誤った育児方法が広まると，股関節脱臼の頻度が増加する恐れがある．出産後の母親が正しい抱き方やDDHに関する知識をどの程度持っているか調べるためにアンケートを行った．

対象と方法

出産後の母親150人(初産婦40人，経産婦50人，不明60人)に，以下の6項目についてアンケート用紙(図1)を用いて質問した．質問3〜6は絵と写真を用いた．なお発育性股関節脱臼の名称は一般的には広まっておらず，アンケート用紙には先天性股関節脱臼と記載した．

1．先天性股関節脱臼は出生時になければ，その後は脱臼は生じないと思っていいたか．

2．出産直後に脱臼していなくても，オムツや抱き方が間違っていれば，脱臼が生じたり，股関節の形成に悪影響することを知っていたかどうか．

3．股関節の動きを制限する横幅の広いオムツと，動きを制限しないオムツのどちらが正しいか．

4．股関節を閉じた抱き方と開いた抱き方(いわゆるコアラ抱っこ)のどちらが正しいか．または両方が正しいか．

5．向き癖と股関節脱臼との関係を知っていたかどうか．

Key words：developmental dislocation of the hip(発育性股関節脱臼)，prevention(予防)，hip(股関節)
連絡先：〒773-8502　徳島県小松島市小松島町字人利ノ口103　徳島赤十字病院整形外科　川崎賀照
電話(0885)32-2555
受付日：平成23年12月21日

股関節検診　アンケート　　（第　子）

1. 先天性股関節脱臼は、出産時に脱臼がなければ、その後は脱臼しないと思っていましたか。　　はい（脱臼しない）　　いいえ（脱臼する）

2. 出産直後に脱臼していなくても、オムツや抱き方が間違っていれば脱臼が生じたり、股関節の形成に悪影響することを知っていましたか。

知っていた　　知らなかった

3. オムツの仕方で正しいと思っていたものに○をつけて下さい。

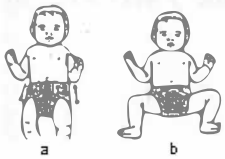


図１　a　b

4. 抱き方で正しいと思っていたものに○をつけて下さい。（両方も可）

図２　a　b

写真１

5. 顔の向き癖（右上の写真１）と股関節脱臼の関係を知っていましたか。

知っていた　　知らなかった

6. 抱っこヒモで、下の写真２のように赤ちゃんを抱くことが、よくないことを知っていましたか　　知っていた　　知らなかった

写真２

図 1.

質問 1.　先天性股関節脱臼は出生時に脱臼がなければ、その後は脱臼しないと思っていましたか

	脱臼しない	脱臼しうる
全体	19%	81%
初産婦	20%	80%
経産婦	16%	84%

質問 2.　出産直後に脱臼していなくても、オムツや抱き方が間違っていれば、脱臼が生じたり股関節の形成に悪影響することを知っていましたか

	知らなかった	知っていた
全体	28%	72%
初産婦	40%	60%
経産婦	14%	86%

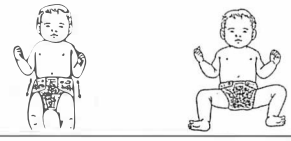
図 2.

6．抱っこひもを用いて股関節の運動を制限した抱き方が，股関節に悪いことを知っていたかどうか．

結　果

1．19%（初産婦 20%，経産婦 16%）が出生時に股関節脱臼がなければ，その後に股関節脱臼は生じないと回答した（図２上）．

質問 3.　正しいオムツはどちらですか



全体	11%	89%
初産婦	12.5%	87.5%
経産婦	12%	88%

質問 4.　正しい抱き方はどちらですか（両方も可）

			両方
全体	41%	51%	8%
初産婦	45%	55%	0%
経産婦	30%	66%	4%

図 3.

質問 5.　顔の向き癖と股関節脱臼の関係を知っていましたか

	知らなかった	知っていた
全体	91%	9%
初産婦	90%	10%
経産婦	86%	14%

質問 6.　抱っこひもで写真のように抱くことが股関節に良くないことを知っていましたか

	知らなかった	知っていた
全体	79%	21%
初産婦	82.5%	17.5%
経産婦	78%	22%

図 4.

2．28%（初産婦 40%，経産婦 14%）がオムツや抱き方が股関節の形成に影響しないと回答した（図 2 下）．

3．11%（初産婦 12．5%，経産婦 12%）が股関節の屈曲開排を制限する横幅の広いオムツを選択した（図 3 上）．

4．41%（初産婦 45%，経産婦 30%）が股関節の開排を制限する抱き方を選択した（図 3 下）．

5．91%（初産婦 90%，経産婦 86%）が向き癖と股関節脱臼との関係を知らなかった（図 4 上）．

6．79%（初産婦 82.5%，経産婦 78%）が抱っこひもの間違った抱き方を悪いと認識していなかった（図 4 下）．

考　察

我が国の DDH は，検診制度の確立や育児方法による予防活動が普及したことにより，その頻度は減少してきた[1)~5)]．しかしながら，近年，抱っこひもの誤った使用が流行っており，DDH の頻度が増加する恐れがある．最近の母親が股関節脱臼予防に関する正しい知識を持っているかどうかを調べるため，今回の調査を行った．

アンケート結果で，約2割の母親が出生時に股関節脱臼がなければ，その後は脱臼しないと誤った認識を持っており，初産婦では4割がオムツや抱き方が股関節の形成に影響しないと回答していた．オムツでは，股関節の動きを制限しない正しい選択をする母親がほとんどであったが，抱っこひもで横抱きすることを悪いと認識しておらず，股関節の脱臼予防や形成にオムツや抱き方などの育児方法が重要であることが認識されていなかった．

われわれの地域の検診制度は，出産直後と1か月検診は小児科医が行い，異常が疑われれば整形外科医に紹介されるが，何も異常がないと判断されれば生後3か月まで整形外科医が股関節の検診を行うことはなく，母親への指導も行われていない．石田は，生後24時間以内が脱臼の一次予防に最も大切で，出産直後から下肢の自由運動育児法による予防活動を提唱し，DDH発生頻度の低下に大いに貢献した[1)2)]．今回のアンケート結果から，母親のDDHに関する認識は低く，出産後早期から母親に理解してもらうには，助産師から出産直後の母親に説明してもらうのが良いと考え，産婦人科病棟でアンケート調査行った後にDDH予防のパンフレットを渡すようにした．しかし，石田が提唱する出産直後から児の下肢自由運動育児法が行われていたわけでなく，DDH予防に関する正しい育児方法の普及には，整形外科医のみならず小児科，産婦人科，助産師なども含めた学会レベルでの活動が今後必要である．

まとめ

1）出産後の母親150人に股関節のアンケート調査を行った．

2）股関節脱臼に関して正しく理解している母親は少なく，抱っこひもを使用した間違った抱き方をする可能性があり，抱き方やオムツ指導などの予防活動があらためて重要であると思われる結果であった．

3）母親に正しい育児方法によるDDHの予防を理解してもらうためには，整形外科のみならず小児科，産婦人科，助産師なども含めた取り組みが必要である．

文　献

1) Ishida K：Prevention of the development of the typical dislocation of the hip. Clin Orthop Relat Res　**126**：167-169. 1977.
2) 石田勝正：小児の股関節脱臼(DDH)の病因と発生予防．日小整会誌　**20**：460-465，2011.
3) 山田順亮：先天性股関節脱臼成立の予防とその実践．整・災外　**29**：609-615，1986.
4) 山田順亮：先天性股関節脱臼の予防活動―過去・現在・未来―．日小整会誌　**20**：466-473，2011.
5) 山室隆夫：先天性股関節脱臼の成立因子とその予防．日小整会誌　**19**：203-211，2010.

Abstract

Awareness to Developmental Dislocation of the Hip : Survey among New Mothers

Yoshiteru Kawasaki, M. D.

Department of Orthopedics Surgery, Tokushima Red Cross Hospital

The incidence of developmental dislocation of the hip (DDH) in neonates. and the indications for surgery, have been remarkably reduced with the usage of baby diapers and baby clothing that can be changed without changing the naturally flexed legs. However use of a baby sling that pushes the legs together in extension and adduction are recently becoming popular, leading to an increased risk to DDH. Here we report results from a survey to 150 new mothers on DDH and associated risk factors. There was general unawareness about the importance to keep the baby's legs in a naturally flexed position to avoid DDH. Only 21% of the new mothers were aware of the wrong use of baby slings. Results suggest that midwives and obstetricians could play a role in advising new mothers on ways to prevent DDH in babies.